GSID

Discussion Paper No.201

韓国密陽百中ノリと甘川蟹網引きに関する調査報告書

韓 寧爛　　櫻井 龍彦

March 2016

Graduate School
of
International Development

NAGOYA UNIVERSITY
NAGOYA　464-8601, JAPAN

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科

韓国密陽百中ノリと甘川蟹綱引きに関する調査報告書

韓寧爛※・櫻井龍彦※※

※　　関西外国語大学非常勤講師
※※　　名古屋大学大学院国際開発研究科教授

2016 年 3 月 30 日

本稿は 2015 年 8 月 28･29 日の両日、韓国慶尚南道密陽において百中(ペクチュン:백중、旧7月15日)の祝祭のとき行われた密陽百中ノリ(ミリャンペクチュンノリ:밀양 백중놀이)と同じく密陽の甘川蟹綱引き（ガムネゲジュルタンギギ：감내게줄당기기」）の調査報告書である。

（1） はじめに

2015 年 12 月 2 日、アフリカのナミビア共和国で開催された国連教育科学文化機関（ユネスコ）第 10 回無形文化遺産政府間委員会で「綱引きの儀式と試合」(Tugging rituals and games) が人類の無形文化遺産に登録された。これは韓国がベトナム、カンボジア、フィリピンと 4 カ国共同で申請したものである。

今回、無形文化遺産に登録された韓国の綱引き(ジュルダリギ)は、すでに韓国国内で国指定と市･道指定の無形文化財となっている 6 件の行事である。すなわち国指定の霊山(ヨンサン：영산）綱引き(重要無形文化財第 26 号)、機池市（キジシ：기지시）綱引き(重要無形文化財第 75 号)、と市・道指定の三陟（サムチョク：삼척）綱引き(江原道無形文化財第 2 号)、密陽（ミリャン：밀양）甘川（ガムネ：감내）蟹綱引き（慶尚南道無形文化財第 7 号)、宜寧(ウイリョン：의령)大綱引き（慶尚南道無形文化財第 20 号)、南海（ナムヘ：남해）仙区(ソング：선구)綱引き(慶尚南道無形文化財 26 号)の 6 つである。

これらの所在地については、図 1 を参照してほしい。

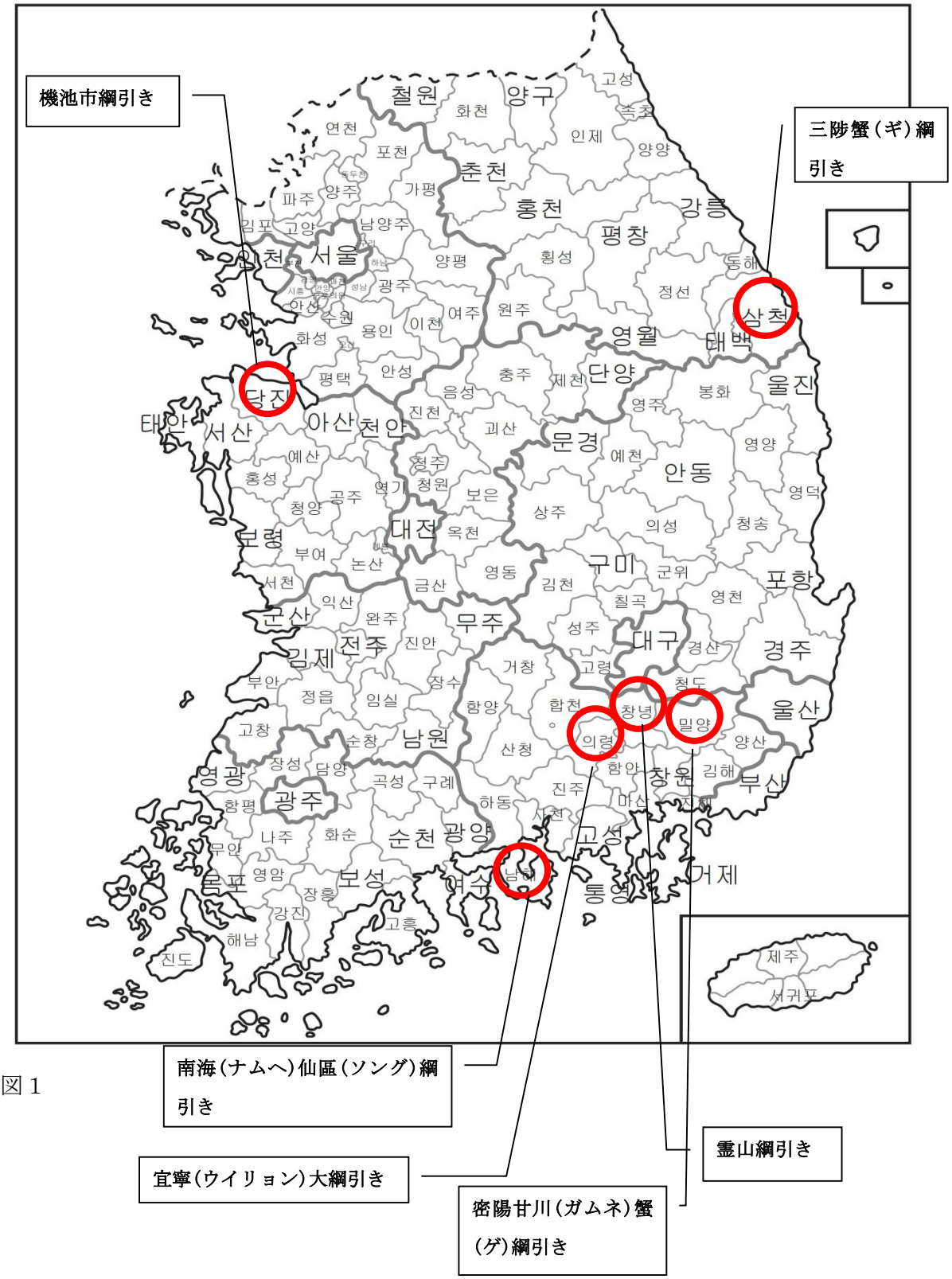

機池市綱引き
三陟蟹（ギ）綱引き
南海（ナムヘ）仙區（ソング）綱引き
宜寧（ウイリョン）大綱引き
密陽甘川（ガムネ）蟹（ゲ）綱引き
靈山綱引き
철원
양구
고성
화천
속초
연천
인제
양양
포천
춘천
가평
양주
파주
홍천
강릉
김포
고양
남양주
평창
인천
서울
양평
횡성
동해
광주
정선
안산
수원
여주
원주
삼척
용인
이천
영월
태백
화성
안성
충주
제천
단양
울진
평택
당진
음성
봉화
진천
영주
태안
서산
아산
천안
괴산
문경
영양
예산
예천
청주
안동
홍성
공주
연기
청원
보은
영덕
청양
상주
의성
청송
대전
옥천
보령
부여
논산
구미
영동
군위
서천
금산
김천
포항
익산
칠곡
영천
군산
완주
무주
성주
대구
경산
경주
김제
전주
진안
거창
고령
부안
정읍
임실
장수
함양
합천
청도
울산
창녕
밀양
고창
순창
남원
산청
의령
양산
영광
장성
담양
곡성
구례
함안
창원
김해
부산
함평
광주
하동
진주
사천
마산
진해
무안
나주
화순
순천
광양
고성
목포
영암
보성
여수
남해
통영
거제
장흥
강진
고흥
해남
진도
제주
서귀포

図 1

ユネスコが綱引きを無形文化遺産として登録したのは、この行事が東アジア・東南アジアの稲作農耕文化のなかで豊作と繁栄をもたらすものであり、共同体の社会的結束や連帯感を強め、新しい農耕周期の始まりを告げる価値をもつものとして評価したからである[1]。

現在、韓国[2]にどれだけの綱引き行事が伝承されているか正確な数、場所、実態などはよくわかっていない。

朝鮮総督府が戦前に調査した記録では 108 カ所を調べているので（朝鮮総督府編,村山智順著『朝鮮の郷土娯楽』朝鮮総督府調査資料第 47 輯、1941 年)、100 を超す地域に存在したことがわかる。忠清北道、忠清南道以南に多く分布していて、北へ行くほど少なくなる。綱引きの材料が稲わらであることを考えると、半島でも南部の稲作農耕地帯に濃厚な文化であるのは自然なことであろう。

現在はこれほどの数は残っていないと思われるが、定期的に年中行事として行われているものとして、ユネスコにも登録された霊山綱引き、機池市綱引き、三陟綱引きなどが有名であり、不定期あるいは祝祭やイベントなどの中で一つの催し物として行われる事例も多い。『韓国歳時風俗事典（한국세시풍속사전）』国立民俗博物館編（2006 年）（デジタル版）を参考に、把握できた綱引き行事の分布図を図 2 に示しておいた。

綱引きが行われる時期は、朝鮮総督府の調査では小正月（上元）の旧暦 1 月 15 日が 90 カ所、秋夕（朝鮮では中秋節を嘉俳日または秋夕という）である旧暦 8 月 15 日が 10 カ所で、圧倒的に小正月（上元）が多い。それぞれこの時期に行う目的は、小正月は年の初めの年占行事として、秋夕は稲や雑穀の収穫時期なので豊作を祝う意味をもっているようである。しかし現在では各地域の民俗祝祭の一つとして行われたり、不定期的に行われたりしている場合が多い。

図 2　韓国の主要な綱引き分布図

1. 忠清南道唐津郡松岳面機池市里の機池市綱引き(ギジシジュルダリギ)
   4 月上旬に行われる。
2. 江原道三陟（サムチョク、삼척）のギ綱引き(ゲ綱引きとも言う)(ギジシジュルダリギ)

---

1 ユネスコの HP に次のようにある。

Tugging rituals and games in the rice-farming cultures of East Asia and Southeast Asia are enacted among communities to ensure abundant harvests and prosperity. They promote social solidarity, provide entertainment and mark the start of a new agricultural cycle.

http://www.unesco.org/culture/ich/en/RL/tugging-rituals-and-games-01080

2 綱引きの分布は朝鮮半島全体にみられるが、北朝鮮の実態が不明であるので、ここでは韓国だけを取り上げる。

三陟上元大満月祭で、一つのプログラムとして行われる。

3. 慶尚南道昌寧郡靈山面の靈山綱引き(ヨンサンジュルダルギ)

霊山３・１文化祭で行われる。

4. 慶尚南道密陽市甘川蟹綱引き(ガムネギジュルダンギギ)

小正月(旧１月 15 日)、7 月の百中(旧 7 月 15 日)、密陽アリラン祝祭(毎年 5 月上旬)、密陽棗祝祭(毎年 10 月下旬)などに行われる。

5. 慶尚南道蔚珍(ウルチン)蟹綱引き(ギジュルダンギギ)

3 月上旬に行われている蔚珍(ウルチン)大蟹祝祭で行われる。

6. 慶尚北道慶山慈仁(ザイン)「韓将軍遊び(ハンジャングンノリ)」　・大綱引き

端午祭(旧 5 月 5 日の前後)に一つのプログラムとして行われる。

7. 慶尚北清道(チョンド)ドジュ綱引き(ドジュジュルダリギ)

2 年に 1 回、上元(旧 1 月 15 日の夜 11 時から)に行われる。

2016 年に行われたので、次回は 2018 年の小正月の夜になる。

8. 蔚山広域市馬頭戯(大綱引き、マデゥヒ)祝祭

毎年「馬頭戯(大綱引き、マデゥヒ)祝祭」に行われる。普通は 10 月 2 週目の週末 3 日間。

9. 忠清北道陰城(ウムソン)ザリガニ綱引き(ガゼジュルダリギ)

陰城(ウムソン)ソルソン文化祭(9 月中旬頃) に行われる。

10. 全羅北道金堤立(ギムゼ)石綱引き(イプソクジュルダリギ)

主に小正月(旧 1 月 15 日)に行われるが､2014 年は 10 月 3 日の｢金堤地平線祝祭｣で、１つのプログラムとして行われた。

11. 京畿道果川(グァチョン)ギジュルダリギ

小正月に行われる。

12. 全羅南道順天市龍綱引き(ヨンジュルダリギ)

農村体験村と指定され、村の体験プログラムの一つとして常設されている。

13. 全羅南道長興上元(ボルム)綱引き

毎年小正月(旧 1 月 15 日)に行われる。

14. 慶尚南道宜寧大綱引き(ウィリョンクンジュルダリギ)

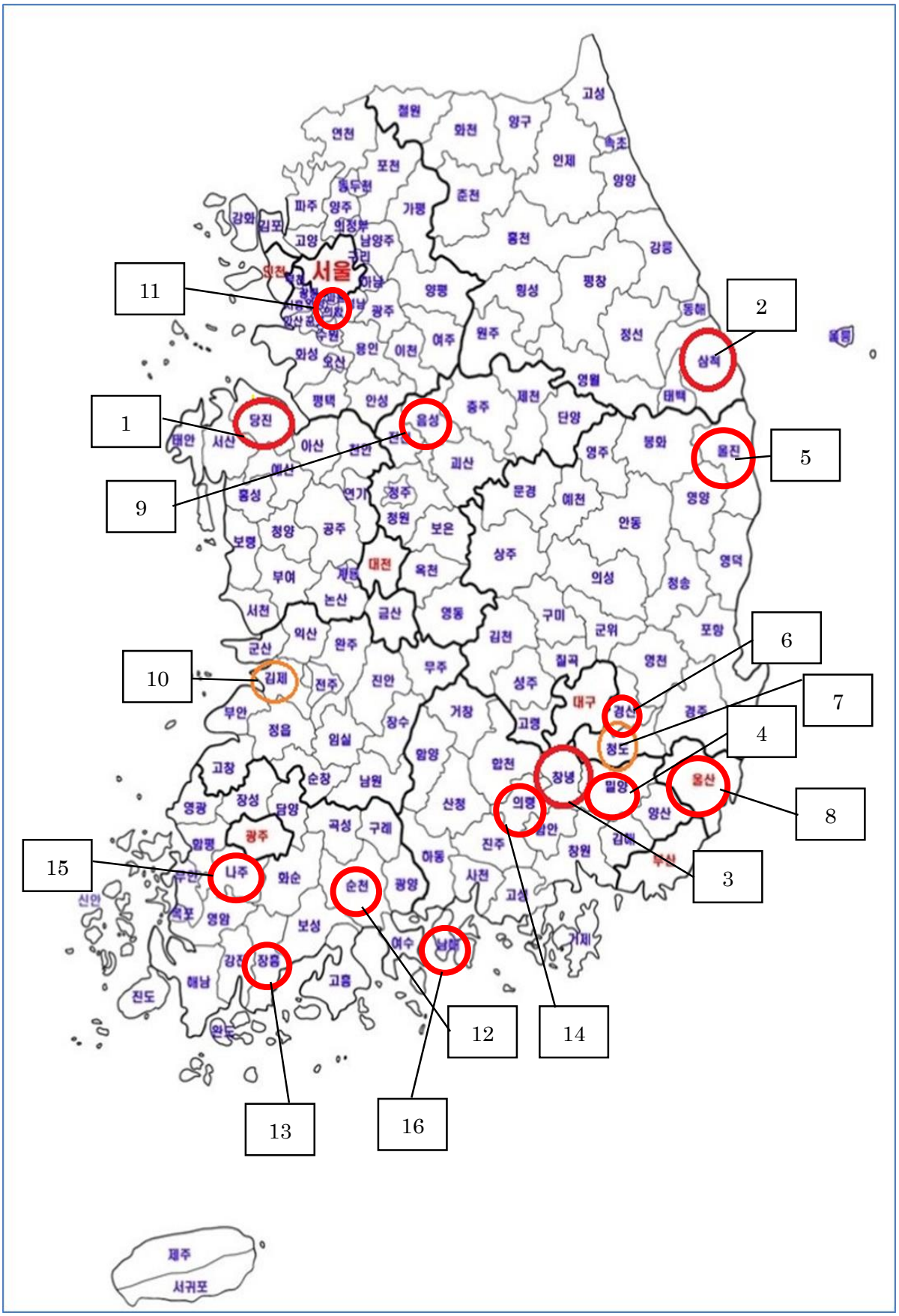
公式には３年毎に 4 月 22 日頃行われる。しかし 2014 年は 6 月 1 日に公設運動場で行われた。

15. 全羅南道羅州東西部綱引き

10 月榮山江文化祝祭のプログラムの１つとして行われる。

16. 慶尚南道南海仙區ジュルクッキ(綱引き)

毎年小正月(旧 1 月 15 日)に行われる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
서울
당진
음성
삼척
울진
김제
경산
청도
장흥
순천
나주
남해
울산
밀양
의령
장성
제주
서귀포

綱引きのやり方は、一本の綱の両端を引き合う場合もあるが、大規模な綱引きの場合、雄綱と雌綱の２本を用意し、それらを結び合わせて引き合う。雄と雌との交合によって象徴的に農作物の結実と豊作を祈願する行為と考えられている。

雌雄の綱は巨大なものである。たとえば機池市の大綱は長さ約 200 メートル、重さ約 40 トン、直径約２メートルもある。宜寧の大綱はさらにそれを上回るという。

写真１　機池市の大綱（2009 年４月 12 日）

このような巨大な雌雄２本の綱を結合させて引き合う綱引きは、韓国以外には日本にしかない。たとえば沖縄の那覇、糸満、与那原などの大綱、秋田県刈和野の大綱はほぼ同規模のものである。

今回ユネスコに登録された韓国の６つの綱引きのうち、ユニークなのが密陽甘川蟹綱引き（Folk Play of Crab Tug of War）である。まず時期が夏の真っ盛りの旧暦７月 15 日である。そして綱の形態や引き方は、写真２をみてわかるように、一般に綱引きという言葉から想像するやり方とは随分違っている。円形の縄を中心に置いて、その輪に５本ずつ縄を付け、1：1 の２人で、または 5：5 の 10 人で引きあう。この人数は多くなると 25：25 のこともある。

写真２　密陽甘川蟹綱引き（2015 年８月 29 日）

綱引きは普通、引き手が二方向に分かれ対面して引きあうものであるが、蟹綱引きは逆に背中を向きあわせて引き合う。綱の先を首に掛け、手足で地面を這うように引っ張り合う姿が蟹の跛行に似ているので、このように呼ばれる。

韓国では蟹綱引きと呼ばれる行事は、ほかにユネスコにも登録された江原道三陟のギ綱引き

（기줄당기기）がある。しかしこれは、名称にギ（蟹）がついているものの、雌雄二本の綱を対面で引き合う一般的な形式で、甘川のようなものとは全く違う。甘川と同じように蟹の姿を模して引くのは慶尚南道蔚珍（ウルチン：울진）蟹綱引き（ギジュルダンギギ：기줄당기기）である。旧 1 月 15 日と 3 月上旬に行われている蔚珍大蟹祝祭で披露されるという。小正月の満月の日、大蟹が捕れる海岸地域の村で、婦女たちが行っているノリ（遊び）であり、蟹は赤い色と多節の足をもつため、辟邪の存在として認識されている。

朝鮮総督府編，村山智順著『朝鮮の郷土娯楽』の江原道華川にも正月に蟹索引があると記されているが、「村対抗の綱引きのこと」とあるだけで実態はわからない[3]。名称からは蟹綱引きと思われる。

写真３　蔚珍蟹綱引き[4]

また蟹ではなくザリガニを名称に冠した忠清北道陰城（ウムソン：음성）ザリガニ綱引き（ガゼジュルダリギ：가재줄다리기）（Tug-of-War Shaped Like a Crawfish）がある。いまは陰城ソルソン文化祭（9 月中旬頃）で、子どものノリとして伝承されているが、本来は小正月にソナン（城隍）堂でソナン祭をしたあと行われていたノリである。形式は、短い綱の両側に輪を作り、それを首にかけて綱を股の間に通し、引き合うものである。

また朝鮮総督府編，村山智順著『朝鮮の郷土娯楽』によれば、慶尚南道咸安には「亀まね遊び」（やる時期は随時）があり、「二人の子供が縄をまるくし両方から長さ約二十米に結び両方共首にかけ股下から二線を通し相反対の方向に図の如く互いに引く。両方とも四つ這いになって引張り中央の線より多く自分の方へ引きたる方が勝ちである。」（p199）とあり、図もついている。これはまさに蟹綱引きであるが、ここでは亀と称している。

---

[3] 朝鮮総督府編，村山智順著『朝鮮の郷土娯楽』朝鮮総督府調査資料第 47 輯、1941 年（復刻版　韓国併合史研究資料 72　龍渓書舎　2008 年）

[4] 南・ヒョウソン（남효선）記者「地域社会の祝祭、このままで良いのか：지역사회 축제 이대로 좋은가」『市民社会新聞』第 2 号 14 面、2007 年 5 月 7 日から。

（２）密陽・甘川の概況

密陽市は慶尚南道の北東部に位した内陸都市で、釜山と大邱の中間地点に位置する。釜山からは韓国の新幹線である KTX で約 40 分と近い。人口は約 11 万、世帯数は約 5 万である(2016 年 1 月末)。

東・西・北 3 面は華岳山（932m)、迦智山((1,240m）などの険しい山で囲まれているが、南側は洛東江と密陽江流域に広々とした平野が開けて穀倉地帯をなしている。水田が全耕地面積の 71％に達する典型的な稲作地域である。2013 年の統計によると農家数は 10,654 戸、農業人口数は 25,637 名である。主な農産物は米・麦・小麦・豆・さつま芋などの穀物類と大根・白菜・唐辛子・リンゴ・ナツメなどの野菜・果物の栽培が盛んである。

密陽は韓国３大アリランとして有名な「密陽アリラン」の発祥地である。毎年５月になると密陽アリラン祭りが華やかに開催される。また韓国三大楼閣の１つ嶺南楼(ヨンナムル)が市内の中心を流れる南川江の北岸にある。郊外には表忠寺(ピョチュンサ)や万魚寺(マノサ)などの名刹がある。

密陽市のホームページから 1910 年、1975 年、現在の密陽の街並みの変遷がわかる写真で掲げておく。

写真４　密陽市ホームページ(日本語版 http://jpn.miryang.go.kr/)

蟹綱引きの行われる甘川は「ガムネ：감내」あるいは「ガムチョン：감천」という。密

陽市府北(ブブク：부북)面の中央に流れている府北川の下流である。現在「上甘(サンガム里：상감리」(行政名))と呼ばれている「甘川里(ガムネリ)」の東側に流れている。伝説では川の水が甘かったので「甘川」と言ったが、今はその甘さは名前にだけ残っている。

（3）百中とはなにか

百中（ペクチュン：백중)とは韓国のお盆のことでペクチュンナル(亡魂日：망혼일)ともいい、旧暦 7 月 15 日におこなわれる。亡魂日と言うのは、薦新といってこの日に亡き親の霊魂を慰労するために酒・飲食・果物を供えて招くことによる[5]。

今回、密陽郊外の表忠寺で百中行事を見ることができたので簡単に述べておく。

表忠寺は密陽の東郊外 20 キロほどの丹塲面(ダンジャンミョン)九川里(グチョンリ)載薬山(ゼヤクサン）(1,108m)の麓にある名刹である。大韓仏教曹溪宗第 15 教区の本寺である通度寺の末寺であり、天皇山表忠寺とも言う。曹溪宗は韓国仏教界で最大の勢力を有する禅系の宗派である。表忠寺は新羅時代(829 年) に建てられたので 1200 年近い歴史がある。

写真５　表忠寺

表門と本殿である大光殿にかけられた横断幕には 8 月 28 日午前 10 時から「廻向」の案内がある。

写真６　表門

[5] 姜在彦訳、洪錫謨　1971『東国歳時記』平凡社　東洋文庫 193：124

奉	●入齋：佛歴 2559(2015)7.10(金)(陰 5.25)午前 10 時●廻向：8.28(金)(陰 7.15)午前 10 時	行
	百中(盂蘭盆節) 先亡父母 一切靈駕 薦度 49 齋	
	大韓民国佛教曹溪宗第 15 教区　四溟大師護国聖地　表忠寺	

写真７　大光殿

奉	仏様の眞身舍利の再来を歓迎します	行
	表忠寺　四部大衆 一同	

駅前からタクシーに乗り、到着したのが 11 時ごろであったので、すでに本殿で住持が説教をし、多くの信徒が法要を営んで死者を追善していた。信徒はほとんどが女性である。盂蘭盆斎のような仏教儀礼に韓国では女性参与が多いことについては、李京燁「韓国の目連伝承と盂蘭盆斎」を参照[6]。

写真８　霊駕薦度位牌祭壇が設けられている

大光殿の横の出入り口には施餓鬼用の食事である「高矢禮（ゴシレ）」も用意されていた。一般の家庭でもこの日は玄関の外に置く。写真９の右下の容器の中身はタンというもので、なかに豆腐、大根は必ず入れる（ここでは椎茸も入っていた）。上はもやし、わらび、白菜、キキョウ、大根のナムルである。

写真９　ゴシレ

最後の行事となる奉送は、僧侶を先頭に信徒が行列をなして大光殿から外に出て、「南無阿弥陀仏」と彫られた石碑と焼台の前でおこなわれた。信徒は伏し拝み紙銭を燃やして亡者の霊魂を送る。12 時ごろに終了した。

6 野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済－目連救母伝承と芸能の諸相』風響社、2007 年。

（4）密陽百中ノリについて

表忠寺の仏教事例でみたように、百中は寺院では死者の霊を極楽に導く薦度儀礼をするが、民間では農民の遊びが行われた。民間への浸透には、「新羅のとき流入した「盂蘭盆齋」が高麗時代を経て、王室と貴族層を中心とした支配階級の佛教儀礼として定着したが、仏教の地位が下がった朝鮮時代には民間に深く入って、その結果、民俗と融合したのが百中である」という背景があると思われる[7]。

この時期は田植えも終わり三度めの除草作業もおえて一息つき、あとは秋の収穫を待つだけという農閑期で、遊びは農作業から解放された農民の慰労の意味があった。もちろんただ休息や慰労の宴としての意味だけではなく、農神祭が伴うことからもわかるとおり、来る豊作を祈ることが重要な目的である。

かつて朝鮮の各地でみられた百中の遊びは、いまはほとんど見られなくなった。残っているなかで最も有名なものが密陽の百中ノリである。

まず 8 月 28 日（金）、29 日（土）の二日間で観察したときの様子を日誌の形で以下に記録しておく。

8 月 28 日

午前、表忠寺で百中の盂蘭盆斎をみる。午後、百中ノリの見学。

日中は 32 度。暑い。この暑さなので野外での祭典は日が沈みかけたころから始まる。百中ノリなどが行われる場所は密陽駅から歩いて 30 分くらいの南川江の河原である。韓国三大楼閣の１つである嶺南楼（ヨンナムル）が対岸にみえる。河原は広場として整備されていて、いろいろな行事に利用されている。

[7] Ju Gang-hyeon「ペクチュン」『韓国民族大百科事典』、韓国中央研究院　1992 年（デジタル版）

写真 10　会場の南川江水際(デゥンチ：둔치)

写真 11　嶺南楼(ヨンナムル)の対岸の河原がイベント広場／密陽小学校の子どもたち

百中ノリは「百中」前後の辰の日に行うことになっているが、2015 年は辰の日とは関係なく 7 月 15 日（すなわち 8 月 28 日）に行われた。またいまこの行事は地域の文化祭としてイベント化しているので、翌日もノリは行われた。他地域のノリとの交流会もあり、今回は江原道江陵の農楽隊、、全羅南道珍島のダシレギ、京畿道安城（アンソン）市立「バウドギ」風物団（農楽隊）が招待されていた。

綱引きは翌日のみで今日は行わない。

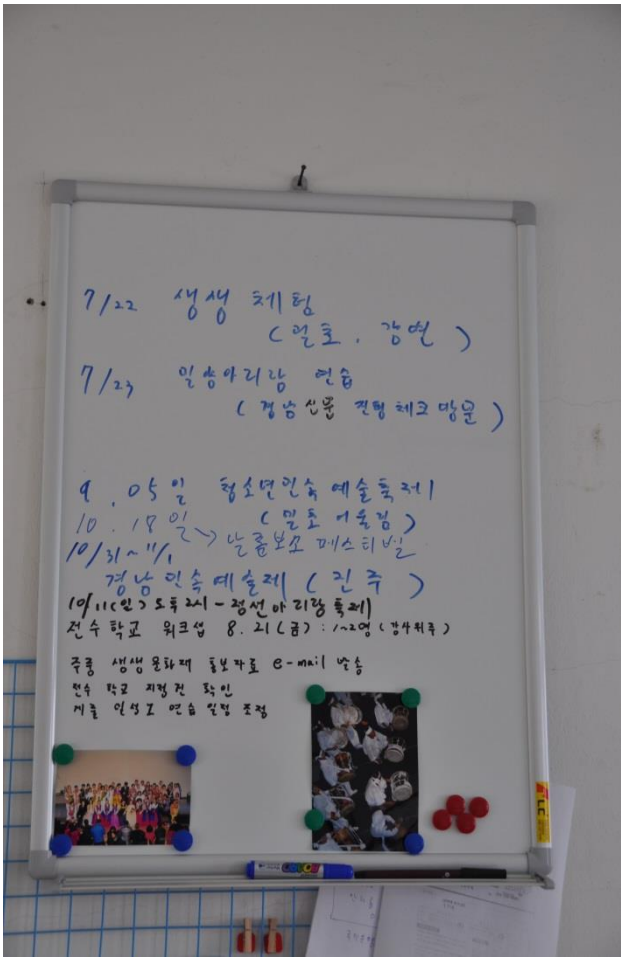
5：30　密陽小学校の生徒たちがノリを披露（写真 11)。河原の土手の傾斜地は観客が見学できるように階段状に作られているが、観客は多いとはいえない。翌日もそうであったが、外地からの観光客でいっぱいになるという感じではない。地元の人たちが見に来ているぐらいのにぎわいであった。

子どもたちは 1 年生から 6 年生まで。韓国にも日本の「総合的な学習の時間」に似たものがあり、そこで密陽百中ノリの伝承授業を選択した子どもたちが、日頃の練習の成果を披露する機会となっている。ノリの演技を教えているのは、密陽百中ノリ保存会事務室に勤め自らも伝授者であるの崔(チョイ)・ソンヒ(최선희)さん（女性）であった。

保存会もノリや綱引きの伝統行事を次世代、若い人にどのように伝承していったらよいかについて頭を痛めている。保存会事務室の壁にかけてあったスケジュール表をみると、

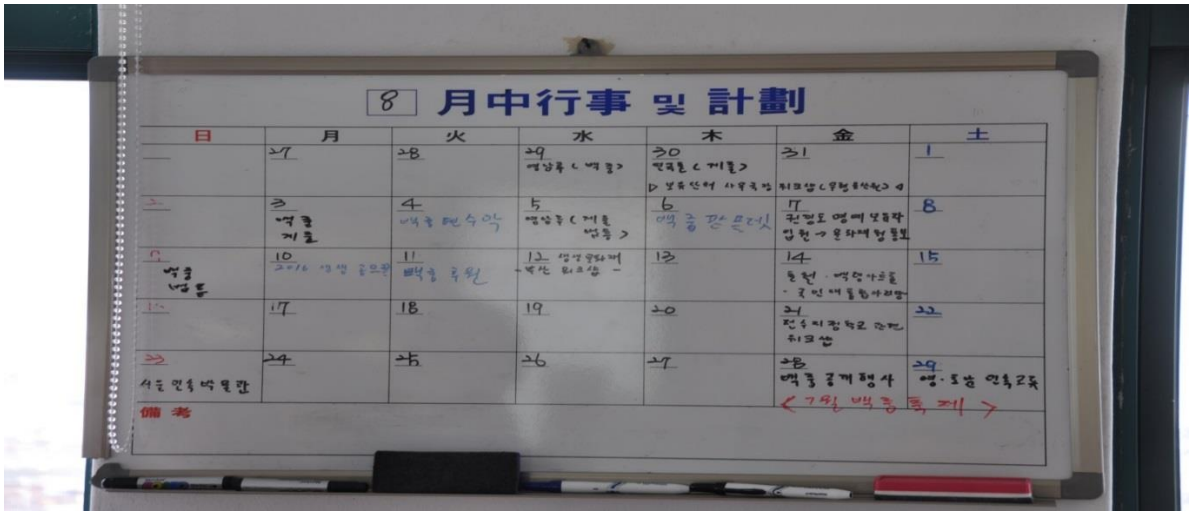
密陽小学校や密陽高校への練習日程が書いてあるので、こうした地道な活動を続けているものと思われる。

写真 12　スケジュール表



7/22　センセン(生々しい)体験
(密陽小学校、講演)
7/23　密陽アリラン練習
(慶南新聞、進行チェック訪問)
9．05 日　青少年民俗芸術祝祭
(密陽小学校「オウルミム」
10.18 日　「ナルジョムボソ」(「ちょっと私を見てね」と言う意味の言葉)フェスティバル)
10/31～11/1 慶南民俗芸術祭(晋州)
10/11(日)午後 2 時　旌善(チョンソン)アリラン祝祭
伝授学校ワークショップ　8.21(金)1～2 名(講師を主とする)
週中(週末までに) センセン文化祭広報資料 e-mail 発送
伝授学校指定件確認
ゲジュル密城高校練習日程調整

写真 13　8 月中行事及び計画



8 月中行事及び計画

日	月	火	水	木	金	土
	2	28	29 嶺南楼(百中)	3 演劇村(ゲジ	31	
				▶保有団体事務局長ワークショップ◀ (無形遺産院)		
2	3 法興 ゲジュル	4 百中垂れ幕 (プラカード)	5 嶺南楼(ゲジュル 法興)	6 百中パンフレット	7 権・ギョンド名誉保有者入院→文化財庁に通報	
9 百中 法興	10 2016 センセン公募終	11 百中後援	12 センセン文化祭 釜山ワークショップ	13	14 春川・ベンニョンアートホール —国民大統合アリラン	15
16	17	18	19	20	21 伝授指定学校関連ワークショップ	22
2 ソウル民俗博物館	2	25	26	2	28 百中公開行事 ＜７月百中祝祭＞	2 嶺・湖南民俗交流
備　考						

以下、ノリの行事がはじまるが、保存会長の河龍富さんによると公演形式になっていて、本来の祝祭の性格はもう残っていないという。

「(ノリは) 文化財という形式になることで、ノリ、昔の祝祭としての性格はもう残っているのではなく、いまは無形文化財という形式として作られているので、それに従ってやっています。昔は全体的にやっている途中でお酒を飲んだりしてから、再びやったりしましたが、今は公演の時間に合わせてする遊び(ノリ)になってしまったというふうに思ってくだされば いいです。」(資料:「聞き書　韓国密陽百中ノリ・甘川蟹綱引き」p6。以下資料と略す。)

日本のお祭りといえば酒がつきもので、随分と酔っ払って傍若無人になることもあるが、確かにこのノリは当事者たちが飲酒することはなく、いたってまじめであった。

村落共同体で行われた密陽のノリは本来以下のように行われた。

構成はアプノリ(前遊び)、ボンノリ(本遊び)、デゥイッノリ(後遊び)の3部分となっている。

① アプノリ(前遊び)

朴氏老婆堂山祭で村の安寧と繁栄を祈願し、「オトジシンプリ(五土地神喜ばせ)」という歌を歌いながら「地神踏み」をする。ゾッジュルディリギ(横綱結び)をし、それが終わると綱引きの力士を選ぶ「ノンバリノリ」をする。「ノンバリノリ」は一人が座って、二人を横にして両手でつかみ腰の力で起きるものである (写真30)。

ここで選ばれた力士は首農夫という役をもらい、彼を二人の男が手車に乗せて遊ぶ。このとき密陽アリランを歌う。

遊び手はチゲを背負って、木の棒を持って打ちながら拍子を取るが、これを「チゲモクバルノリ」という。

その後、パングッ、敷地奪い(この遊びは、ゲジュルダンギギの前にする遊びであって、ジュルダリギをする時有利な場所を取るためにする勝負である。対抗する村の首農夫が小さい2人用の綱を首に掛けて引き、勝負をする。)と続く。

その後、ゲジュルオルギ(蟹綱のもてあそび:次のボンノリの本番綱引きの前に綱を担いで遊ぶこと)が行われる。

②ボンノリ(本遊び)

ボンノリ(本遊び)のゲジュルダンギギが始まる。ゲジュルダンギギは審判役の「ジュルドガム(綱の都監)」が銅鑼を打つと、綱を引き始め100を数える間(約3分程度)引く。勝負は中央から綱をたくさん引いて行った側が勝つ。

③デゥイッノリ(後遊び)

ゲジュルダンギギが終わったら、皆が交わって踊りながら遊ぶデゥイッノリ(後遊び)で

終わる[8]。

公演される現在のノリは祝祭の性格は希薄であるが、農神への祈願という民間信仰の性格は模擬的かつ演出的ながらも見られるので、その点を指摘しながら時系列に整理しておきたい。

5：40　農神台に供え物の準備が始まる。

写真 14　農神台

広場にはすでに 360 本の麻ガラを 4 束にしてより合わせてつくった柱状の農神台が立てられていた。4 束は四季を表している。てっぺんから垂れた綱に 12 個ずつ五色の袋が結びつけられている。12 は 1 年 12 ヶ月を示している。袋には米、豆などの穀物と祈願文が入っている。北（黒色）、南（赤色）、東（青色）、西（白色）、中央（黄色）を表す五色の布を巻いて五方神将を表す。

農楽隊は中央に立てたこの柱のまわりをめぐって歌舞を繰り広げるが、柱は神話学的には宇宙樹・宇宙柱・世界軸（axis mundi）の表象である。すなわち五色は宇宙の四方・中央の空間とそれぞれの土地神を象徴し、４，12、360 という数字は時間観念を象徴している。時空間の中心に立ち天と地を貫く柱に神が降り立ち、豊穣、除災、平安を祈念する聖物であった。

農神への供え物（写真 15）は、上段中央に内臓を取り除いた明太(スケトウダラ)を半乾燥させた「コダリ」(写真 16)。右側に小豆餅（写真 17)。これは臼で挽いた小麦を練りこねたものに小豆をまぜて蒸した餅(トゥク)である。もともとは小豆だけ入れるが、ここでは小豆と落花生と緑豆が混ざっている。左側に大豆(黄色い豆)と小麦を炒ったもの（写真 18)。大きい方が味噌を作る時に使う大豆で、小さい方が小麦である。

小豆餅と大豆・小麦を炒った食べ物は「コムベギチャム」といい、百中ノリで作男たち

[8]『韓国歳時風俗事典(한국세시풍속사전)』国立民俗博物館、2006 年（デジタル版）

が食べるものである。

写真 15　供物

写真 16　コダリ

写真 17　小豆餅

写真 18　大豆と小麦

6：00　雷とともに突然のにわか雨。

6：05　雨のなか開会式

密陽市長、地元出身国会議員、市議会議員、慶尚南道道議会副議長の順で挨拶

6：30　雨止まず、進行が遅れる間、密陽ノリ保存会会長の河龍富さんが土砂降りのなか、観客サービスで創作舞踊を披露（写真 19）。河さんは密陽演劇村村長でもあり演劇も舞踏もできる多才な人である。こういう舞踊を持って日本では新潟、大阪、フランスにも行ったという。

写真 19　河龍富さん　即興創作舞踊

6：45　雨は次第に小ぶりになってくる。大阪から 6 名の日本人が来ていて、感謝の記念品を保存会に献呈。大阪に密陽ノリのファンクラブがあり、毎年百中のときツアーを組んで見学に来るようだ。

7：10　農神祭がはじまる。

農神台のまわりを農楽隊が囲むなか、「神将クッ」が行われ「告祀（コサ）」が唱えられる。この祈念の唱え言は、

> 天上の上帝さま、天上天下の竜王さま、風を順調に、浮塵子（ウンカ）や種々の虫もなく、今年の農事うまくいくように、天に誓って善良なる百姓の、心配事を軽くし、総角（独り者）の身の上を免れるようにしてください（拝礼 3 回）。上の田の竜神さま、下の田の竜神さま、飛ぶ鳥もふせぎ、野鼠もふせぎ、回虫もふせぎ、蚊もふせいでください。
>
> ええい、コシレ、総角の身の上を逃れられないんだったら、農神もくそもあるもんか、おいらは餅でも食おう（拝礼 3 回）[9]。

内容は野村によれば、農事にとっての大敵である鳥、ネズミ、虫を除くことと良き伴侶

---

[9] 鄭晒浩・朴辰柱『密陽百中戯』（無形文化財指定調査報告書第 138 号、文化財管理局、1980：12。いま野村伸一「朝鮮の農神祭その他」星野紘・野村伸一編『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版、2000：236 から引用。

を得ることを祈るもの。「神将クッ」は「神将の力を借りて雑鬼を鎮める祭儀のこと」（野村　2000：237）である。

市長ら来賓も農神に参拝したあと一般の人も参拝。お賽銭は豚の口に挟んでいる。

写真 20　神将クッ

7：30　招待した珍島や京畿道安城の農楽隊がノリを披露。

交流活動の一環として、今回は江原道江陵、全羅南道珍島、京畿道安城の農楽隊が来ていた。

交流による公演は 8：15 に終わり、最後は密陽農楽隊による百中ノリ。農神台のまえで拝礼の後、踊りがはじまる。田植えや草刈りなどの農作業の仕草が入っている。両班おどり、フリークス踊りとつづく。病人や身体に障害のある人たちの不自由な動作を真似たものだが、この病身舞（ピョンシンチュム）こそが密陽ノリが他地域のノリと区別され、この舞の存在によって文化財に指定された特徴といえる。

この病身舞は見世物としての興行的意味があるものではない。野村伸一は次のように述べている。

「農事の遊びに、病身舞が集中的にみられるのはなぜなのか。これらは仮面戯やマダンクッのそれらと同じ事で、生をまっとうしえなかった雑鬼雑神のクッの場への参加とみるべきであろう。かれらが農神竿の周りでこころゆくまで踊り慰撫されて帰っていくことで、期待されたものは何か。それは穀物の実りを損なう災い、虫の派生を防ぐことであろう。かれら鬼神の帰趨は凶作と関係していたとみるべきである。」[10]

異形のものへの鎮魂と慰撫によって、その神威を借り、穀物への虫害、獣害を防御し豊穣を祈る重要な遊びの要素であった。

9：33　農楽隊の歌舞がおわると観客も輪の中に入ってみんなで踊り、盛り上がったところで今日の催しは終了する。

---

[10] 野村伸一「朝鮮の農神祭その他」星野紘・野村伸一編『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版、2000：238。

写真 21　チャクトゥマルタギ（木枠の上に作男を乗せて歩き回るあそび）

写真 22　喇叭を吹きサッカッ（笠：삿갓）を逆さまにかぶった作男（モスム）

李容満綱引き保存会会長

写真 23　両班おどり

河龍富百中ノリ保存会会長

写真 24　病身舞

8 月 29 日（土）

10：30　密陽民俗芸術伝授会館へ行き、ハ・ヨンブ（河龍富、1955 生、人間文化財、密陽百中ノリ保存会会長）さんとイ・ヨンマン（李容満、1939 生、密陽甘川ゲジュルダンギギ保存会会長、密陽百中ノリ保存会副会長）さんに聞き取りをする。話はほとんど河さんがした。11 時 30 分から約 1 時間。

伝授会館は密陽市内一洞 431-30 番地にあり高台にあるため密陽市がながめられる。西方やや遠目には蟹綱引きの発祥地である甘川が見える。保存会の事務室玄関に蟹綱引き保存会と百中ノリ保存会の看板が両方掛かっている。事務室としては一つである。実際、会員も同じメンバーである。

聞き取りの内容は付録としてつけた「聞き書き　密陽百中ノリと蟹綱引き」を参照。

写真 25　密陽民俗芸術伝授会館

写真 26　（左）甘川ゲジュルダンギギ保存会　（右）密陽百中ノリ保存会

午後　百中ノリなどがおこなわれる南江川河原の広場へ移動。

日中は太陽が照りつけ野外は暑いので、スケジュールは日が傾き始める 3 時過ぎからはじまるよう組んである。暑いせいか観客はそう多くはない。

3：30　河会長があいさつ

3：05　慶尚南道道議員あいさつ

つづいてノリがはじまり、そのなかで蟹綱引きも行われる。

写真 27　蟹を捕る漁具トンバル(통발)を背負って踊るノリ

写真 28　トンバル(통발)

綱作りから始まるが、ノリの農作業自体がすべて模擬であるため、綱作りも所作だけで実際に編むわけではない。チャクテゥマル(木の枠)を組み立てて、綱をそれに架けて編んでいく方法である。やぐらを組んだこのやり方は日本の綱作りでも各地でみられる。

写真 29　チャクテゥマル

綱作りが終わると「ノンバルノリ」である。

綱引きの前､作男のなかから力が強い人を選ぶための遊びの一つにノンバルノリがある。

デゥルドル持ち上げという、重い石を持ち上げる力比べは行われなかった。広場には木製のものが置いてあった。石は危険なので、代わりに木製ということであった。

写真 30　ノンバルノリ

写真 31　のぼりに見るデゥルドル持ち上げ

写真 32　力石（仮のもので木製）

　続いて遊び手はチゲを背負って、木の棒を持って打ちながら「チゲモクバルノリ」をする。

写真 33　チゲモクバルノリ

　それがおわると、いよいよ蟹綱引きである。

　上甘、下甘ののぼりがあるので、起源説のとおり上甘と下甘の戦いが再現されている。

　まず１：１で。李ヨンマンさんの銅鑼の合図で作男二人が引き合う。

　上甘側が勝利。上甘側の村人が輪になって踊り喜びを表す。

試合は１回のみ。

写真 34　１：１

続いて５：５。双方 10 名がまず綱をもって上下し輪を空中に高く掲げたり地面に降ろしたりする。それを 3 回。地面に打ちつけるかと思いきや、その動作はなかった。

今回も上甘の勝ち。勝負は１回のみ。いずれも農楽隊の人がおこなう。（写真２）

河さんが子どもに呼びかけ、子どもの綱引きが１回。これも上甘側が勝つ。

それがおわると、最後は大人の観客が参加。1 回のみ。またしても上甘が勝つ。参加者には記念品が配られる。

公演であるため勝負はすべて１回であったが、本来は 3 回勝負であった。（資料：12）開始の合図、および勝負の審判は綱引き保存会会長の李さんがしていたが、甘川でやっていたころは村の最高の長老の役目であったという。（資料：12）

はじめに 1:1 で対決するのは綱引きの陣地取りだったようである。河さんは次のように語る。

「勝った方が席を取る。良い場所の占領です。１対１の対決があって、１対１の対決は、だから良い場所を占めることです。上村と下村の各村の最高の力持ち（力士）が出て、１対１で綱を引いて良い場所を占めて、この場合は蟹を捕るための良い場所ではなく、力比べゲジュルを 25 名の壮丁が引くための場所を占領するためです。場所と言っても少し傾斜がある所もあるようで、引きやすい、だから綱を引く時、有利な場所を占領するための１対１の対決があって、次は 25 名ずつ両側に、蟹の足が 5 個で、蟹の節（関節）が 5 個だから、25 名が両側で引く。25 名が引いて、ここで勝った方がいい席（場所）を占める。」（資料：2）

ここでいう 25 名は 25：25 の意味で総勢 50 名ということになるが、今回の公演では 5：5 であった。50 名の規模でおこなうのは、特別な祝祭のときだけのようである。石を持ち上げて力士選びをするのも 1：1 の選手を選ぶのが目的とわかる。

3：51～4：30　密陽法興上元ノリ（ ボプンサンウォンノリ：법흥 상원놀이）の上演。

法興のノリは 1993 年、慶尚南道の無形文化財に指定されている。上元（旧 1 月 15 日）に行うものだが、華やかな農楽隊はイベントに招かれて公演している。

旧暦 1 月 15 日すなわち上元の日に村人たちが堂山木（ダンサンナム、村の守護神が鎮座するといわれる木）の前の広場に集まって、平安と豊作を祈って歌舞をする堂山祭をおこなう。今回は会場に仮設の「法興堂山霊位」が置かれそこで祭儀を再現している。

写真 35　法興堂山霊位

ノリには「農者天下之大本」ほか東西南北と中央の五方位の土地神・守護神である神将の旗（のぼり）東方青帝将軍、南方赤帝将軍、北方黒帝将軍、西方白帝将軍、中央黄帝将軍が登場する。

中央には農神台ではなく松の葉積み上げたものが置かれ、そのまわりを廻る形で歌舞が進行する。韓国の小正月行事は最後に「ダルジプ（月屋。15 日の満月にちなんだ月の家の意味）テウギ（燃やし、焼き）」（달집 태우기）をして終わる。「ダルジプ（달집）」は、行事やノリで使ったものすべてと村の各家の災厄を集めて、それを積み上げたもの。それらをすべて燃やすことで厄払いをするのが「ダルジプ（月屋）テウギ（燃やし、焼き）」である。日本のどんど焼きと同じである。ただ公演の中では実際に火をつけることができないので置いてあるだけである。なおダルジブに凧がつけてあるが、これはノリのなかの一つに凧揚げ遊びがあるので、ここにつけてある。遊びにはほかに跳板戯（ノルティギ：널뛰기。シーソー）、「ユンノリ（윷놀이）」などもあり、これは歌舞のじゃまにならないように会場の横の方でやっている。といっても公演の一種目としての演出でしかない。

写真 36　薪ユンノリ（장작윷놀이）　小正月の体表的な民俗遊び

写真 37　ダルジプ　日本のどんど焼きに似ている。遊びの一つである凧がついている

農楽隊はこのあと、田植え、草刈り、鎌（ホミ）を研ぐ、稲刈り、脱穀など一連の農作業の模擬をする

4：37～江陵から来た農楽隊の演技

5：16～密陽ノリの演技

長鼓 5 人、太鼓 8 人、鉦 2 人、ドラ 1 人。昨晩とほぼ同様の演目。病身舞もある。

5：47～綱渡り

京畿道果川(グァチョン)市にある韓国綱渡り保存会から来ている綱渡り人間文化財の金・デギュンさん（全羅北道井邑(ジョンウプ)出身）と進行役の南・ヘウンさんの息子南・チャンドンさんの二人が演技。

6：40　すべての演目がおわる

写真 38　綱渡り

綱渡り人間文化財の金・デギュンさん

（５）蟹綱引きについて

①綱引きの由来と沿革

さきに述べたように、甘川は川の水が甘かったのでそういう名前が付いている。

蟹綱引きの由来は河龍富さんの話によると次のようである（資料：１）。

村は上甘と下甘に分かれていて（左岸が上甘、右岸が下甘）、土地争いも多かった（百中ノリに上甘、下甘の旗（のぼり）が登場し、綱引きの時にも双方にわかれることが旗でわかる）。甘川は古くから蟹がたくさんとれた。村人は蟹を捕まえて塩辛を作ったり、おかずにしたりするため争って蟹を捕ったが、毎年冬に捕れる蟹は限られているので、お互いに良い場所を取るため反目した。そこで上村と下村が綱引きをして、勝った方が良い場所を占めることにしたという。

河さんによれば、1960 年代までは蟹が結構捕れたという。とくに小正月（上元）の冬に多く捕れるので、そのときに綱引きをしたが、次第に蟹の捕獲量も減少し、綱引き行事も廃れていく。それが 1960 年代以降、韓国では伝統文化の再発掘の動きのなかで人間文化財や無形文化財などの指定がはじまり、百中ノリは 1980 に国の重要無形文化財に、蟹綱引きも 1986 年に慶尚南道の無形文化財に指定されたという。

ノリは 1920 年以降、中断されたようであるが、1973 年５月 17 日密陽公設運動場で行われた第６回慶南民俗芸術競演大会に出演してから広く知られるようになった。1982 年第 23 回全国民俗芸術競演大会に出演し、文化公報部長官賞を受賞し、文化財としての価値が認められ慶尚南道市・道無形文化財に指定された、という経緯のようである。

当時は文献も記録も残っていなかったので、村で聞き取りをおこなって復元に努めたという。その中心人物が現在密陽甘川ゲジュルダンギギ保存会会長であり密陽百中ノリ保存会副会長であるイ・ヨンマン（李容満、1939 生）さんと義父のキム・サンヨンさんである。イ・ヨンマンさんは義父から話を聞き、綱引きがかつてどのように行われていたかの証言をえて復元の形を整えたようである。

由来説からわかるように、本来は「甘川野原（ガムネデゥル：감내들）」で１月 15 日に行

うものでありノリとは関係がなかった。それがいまでは 7 月の百中(旧暦 7 月 15 日)などの農閑期や密陽アリラン行事のなかでも行うようになった。ノリと一緒に行うようになったのは 1983 年からである（資料：5）

② 伝承の実態

現在、祝祭やさまざまなイベントに招待され、年に 20 回ほど公演をするという（資料：5)。伝承組織として保存会がある。市内の密陽民俗芸術伝授会館（写真 25）の横に密陽甘川ゲジュルダンギギ保存会と密陽百中ノリ保存会が一緒に入った事務室がある（写真 26)。ノリと綱引きとそれぞれ別の保存会があるが、実態は一つである。いまはノリの中の一つの演目として綱引きがあるので、一つの組織が伝承している。保存会の会員は 45 名ほど。80%が農業に従事している地元の人である。

ゲジュルダンギギ保存会の会長はイ・ヨンマン(李容満、1939 生）氏で、密陽百中ノリ保存会の副会長でもある。一方密陽百中ノリ保存会会長はハ・ヨンブ(河龍富、1955 生）氏であるが、この人は綱引きの方は助教すなわち伝授者として名を連ねている。また河氏は人間文化財であり、密陽演劇村村長、大慶大学校兼任教授という肩書きもある。

密陽百中ノリ保存会の事務局長は金(キム)・ジュンノ(김준호)氏。保存会の公演などのスケジュール調整や連絡など実務的仕事は彼がすべて担当している。ノリの伝授者でもある。崔(チョイ)・ソンヒ(최선희)氏、女性は密陽百中ノリ保存会の事務室で職員として働いて、自らもノリの伝授者であり、密陽小学校の子どもたちにノリを教えている(写真 11)。

綱は保存会のある場所に倉庫があり、そこにしまってある。農神台もそこに保管されていて、当日綱や農神台もふくめて公演に必要な道具類をトラックに積んで運んでいた。

本体につけた子綱は、それを持って引っ張る部分なので切れることもあり、毎年 1 月 15 日に会員が集まって編みなおす。近年材料となる稲わらの調達に苦労し、農家と契約して入手している事情は日本と同じである。子綱を結ぶ円形のゲジュルは補修ぐらいですむので毎年編むわけではない（資料：９)。

綱は韓国でも大綱引きの場合、その形態から日本と同じように龍蛇に見立ることが多いが、蟹綱引きの綱は龍や蛇と見ることはなく、特別に神聖視もしていない。とはいえ、編み方は左編みで通常の右編みと違うのは、この綱が非日常的な性格をもつからであるという。こういう綱の編み方に関する認識も日本と同様である（資料：10)。

③綱引きの形態、引き方

ケジュルダリギの綱は一般のジュルダリギとは違って、丸いケ(蟹)の形に作る。輪の形をした綱の周りに、蟹の足のような「ギョッジゥル(横綱、サイド綱)」(ゾッジゥル)を結ぶ。これを股の下にいれ、首にまわして掛ける。地面に手足をつけ、這いながら綱を引きあう。

ゲジュルダンギギのゲジュルの数は遊び手の数によって異なる。1：1 か 5：5、多い場合

は 25：25 でやるという。２人で競う小型の綱の円形部分の直径は約 60 ㎝、輪を作る綱自体の直径は約 15 ㎝である。これにつける子綱は直径が 3 ㎝。5：5 の大型のものは円形の直径が約 1 メートル、綱の直径は 25～27 ㎝。これにつける子綱の直径は 3～4 ㎝である。大小いずれも輪の形を保つためプラスチック製のパイプを芯としていて、それに綱を巻き付ける。

写真 39　蟹の胴体にあたる中央の輪

写真 40　5：5 用の綱　子綱は中央が長く脇にいくにつれ短くなる

綱引きはノリの 3 部構成のなかで、アプノリ（前遊び）とボンノリ（本遊び）に現れる。まずアプノリ（前遊び）では、「ノンバリノリ」による力比べで選ばれた首農夫が村を代表して綱引きに有利な陣地を勝ち取るため 1：1 で勝負する。それがおわるとボンノリ（本遊び）となり、村対抗のゲジュルダンギギが始まる。25：25 の場合が多い。勝負は 3 分ほどの間で自分の陣地側に多く引き込んだ方が勝ちである。1 回で勝負は終わる。

③　綱引きの意義

本来は蟹を多く獲るための土地争いから始まった 1 月 15 日の行事であった。小正月の

予祝行事と考えれば、年の初めに五穀豊穣、無病息災などを祈る意義があっただろう。この行事がおなじ農閑期の百中（7 月 15 日）と結びつきノリの中で展開するようになると、農神台の前での五方の土地神への祭祀など、農事との関連はさらに強くなる。稲を中心とした穀物の収穫に支障をきたす虫害、獣害の除去と収穫前の豊穣、さらには村の守護神を祀る堂山祭もあることから村の安寧を祈願する性格も明白になってくる。

（６）武安の龍虎遊び

密陽といえば蟹綱引きだが、雄綱、雌綱を結合させる大綱引きはなかったかというと、河さんによれば以前はあったようである（資料：７）。

1985 年がその大綱による最後の綱引きであったという。中止になった理由は、大規模な綱になると担い手と財力が必要になってくるが、いまは綱を編めるだけの人手はないし、国や地方行政の支持と援助がない。無形文化財として指定され補助金がなければ維持できない。霊山や唐津機池市などの大綱引きの場合は、そういう補助があるので存続が可能となっている。

ただ密陽には綱引きではないが、巨大な雌雄の綱を使った遊びが残っている。密陽には主に密陽百中ノリ、法興上元ノリ、武安龍虎ノリの三つのノリが伝承されているが、この武安龍虎ノリに雌雄の綱が登場する。

場所は甘川ではなく武安（ムアン）である。小正月に武安村の前の田んぼで、西方と東方と分かれて龍虎あそび(ヨンホノリ：용호놀이)をする。このノリは日本の植民地になって中断されたが、1962 年に再現された。

その様子が南川江にかかる密陽橋下のコンクリート壁面に絵で描かれているのでそれを示しておく。

写真 41　武安龍虎ノリ

藁で作った綱の頭の下を垂木で支える。それを壮丁たちが担いで相手と激突する。綱の上に大将が乗って接戦し、相手の綱の頭に差し込まれている旗を先に奪った方が勝利である。綱を引き合うわけではない。

昔は綱ではなく紙や布で青龍と白虎を作って遊んだり、龍虎の仮面や木偶を作って綱の上に乗せて遊んだ　こともある。

小正月の日の昼、西部群と東部群と分かれて激烈に競争する遊びは、村人だけではなく、近隣の村の人々もやって来て見物する。

龍虎ノリは降雨をもたらす龍神と辟邪の虎神を崇拝した民間信仰とも関係があり、農民が豊作と除災のためにおこなうノリと思われる。

（７）韓国における他の蟹式綱引き

蟹綱引きは韓国では他に慶尚南道蔚珍（ウルチン）にもあることは前述した。小正月に行われる点は同じだが、大きな違いがある。綱は稲わらではなく、布製で幅のある紐でかまわないこと。だいたい 30～40 代の婦女のあそびであって男はやらないこと。村対抗の団体戦ではなく、１：１でトーナメント方式であることなどが相違点である（写真３）。

陰城（ウムソン）ザリガニ綱引きも相違点がある。時期は同じ小正月であるが、ここでは子どもたちの遊びである。大人たちは別に大綱引きがあり、その前座として 10 歳前後の子どもによるものがザリガニ綱引きである。またガゼジュルダリギは一つの綱で、二人が勝負する遊びであったが、近年再現された形式は綱を多数作って、二人ずつあるいは数十名が同時に勝負をする遊びへ変貌している。

（８）アイヌの蟹式綱引き

ところで、このような蟹式の綱引きに類似した行事は実はアイヌや中国にも存在するので簡単に紹介しておきたい[11]。

---

[11] 櫻井龍彦　2014「北海道アイヌの綱引きに関する考察－あわせて韓国の蟹綱引き、中国の象綱引きを論ず」『学術発表論文集 2014 雪の民俗と文化国際学術大会-アジアの雪民俗と文化』2014：71-96 参照。

写真 42　アイヌの綱引き

これは明治から昭和初期の間に発行された絵葉書で、旭川アイヌの風俗を紹介したものである。他に情報がないので、この絵はがきの写真が撮影された具体的な時期やどのような行事と関係しているのか、などは不明である。

熊祭に関する記録や絵画類にこのような綱引きは出てこないので、それとは別の行事とおもわれるが、いつ、なんのためにこのような綱引きをするのかは不明である。

額に綱をつけて背中を向きあわせて引きあっている。韓国と中国では股下を通して頚に掛けて引っ張りあうので、その点やり方は違うが、共通点は手を地面について這うようにして引くこと、背中を相手にむけて引くことである。

（9）中国の蟹式綱引き

中国では少数民族にみられる。代表的なのはチベット族の「大象抜河」である。

引くときの格好を蟹にたとえるのではなく、象が森で木材などを運ぶときの格好に似ているので「大象抜河」と呼んでいる。抜河は中国語で綱引きのことである。

写真 43　チベット族の象綱引き（ラサ）[12]

綱は布でよってつくる。長さは数メートルぐらい。この布綱を股間に通し首にかけ、這うかたちで引きあう。甘川と違って中央に輪はない。

伝説によると、チベットの英雄ケサール王が凱旋の途次、何千頭ものヤクを見つけ、それをどう分配するかを綱引きの勝敗で決めたことに由来するという[13]。チベット族は高原民族で稲作民族ではないので、農作物の豊穣を占うための行事とはならない。財物（獲物）の分配決定の手段として綱引きは、一般的に指摘される綱引きの意義、目的とは異なる。

「大象抜河」は、1999 年の第 6 回全国少数民族伝統体育運動会の正式種目に入れられている。そのため各地でおこなわれるようになった。それが全国組織の体育運動会の影響による普及なのか、それともチベット族だけではなく他の民族にも本来ある行事であるといえるのか、その点は不明であるが、「大象抜河」はチベット族以外にもある。キルギス族、黎族、彝族、ダフール族などである。

このなかで変わっているのは、ダフール族の例である。背中を向けてではなく対面形式で、手を使わず首の力で引きあう綱引きである。首の力を競う合うので、「頚力比賽」（比賽は試合のこと）と呼んでいる。

---

[12] http://www.tibet.cn/xzt2011/2011xdj/djxw/201108/t20110831_1129412.html

2011 年 8 月 30 日、「雪頓節」のときチベット伝統体育の競技種目として行われた。「雪」は「ヨーグルト」、「頓」は「宴会」を意味する。修行僧にヨーグルトを供する宗教行事。別名「ヨーグルト祭り」ともいう。（http://www.cango.com.tw/tibetan/a1.htm）

[13] 張濤　2008『中国少数民族伝統体育文化生態学研究』中央民族大学出版社：178

写真 44　ダフール族「頚力比賽」[14]

ダフール族は主に内蒙古、黒竜江省に居住し、人口約 13 万人。モンゴル系の民族で、かつてはオロチョン族やエヴェンキ族などと交易を行っていたので、アイヌとの接触も考えられる。

ただダフール族の綱引きは、背中を向けてするのではなく、対面形式である点が違う。「毎年大晦日の夜、オンドルの上でおこなう。縄を頚に掛け、足の裏をあわせ、両手は膝の上におく。頚の力で綱を引きあう。臀部が床から離れれば負け。清朝のころからあり、15 歳以上のダフール青年は軍事訓練に参加する義務があり、訓練の中に頸の力を鍛える競技種目としてあった。それが次第に民間に流伝していったもの」だという[15]

この説に従えば年占的な儀礼的要素はなく、力を競い合って体を鍛えることが目的の勝負事といえる。

●参考文献（年代順）

韓国語

張籌根(장주근)　1974『韓国の歳時風俗と民俗遊戯(한국의 세시풍속과 민속유희)』大韓基督教書会

密陽郡　1983「ミリボルのオル(미리벌의 얼)―密陽の伝統(밀양의 전통)」

鄭昞浩(정병호)　1985「甘川ゲジュルダリギ(蟹綱引き)（감천게줄다리기)」『伝統文化』１、伝統文化社

慶尚南道　1987『郷土文化誌』慶尚南道

密陽誌編纂委員会編　1987『密陽誌(밀양지)』密陽文化院

韓国学中央研究所　1992『韓国民族文化大事典(한국민족문화대백과사전)』韓国学中央

[14] 『多彩中華』2009：35、北京出版

[15] 盛琦、丁志明『中国伝統体育風俗』百観出版社（台北）　1994：120

研究所
康龍權　1996『郷土の民俗文化』東亜大学校石堂伝統文化研究院
国立民俗博物館　2006『韓国歳時風俗事典(한국세시풍속사전)』国立民俗博物館
国土地理情報院　2011『韓国地名由来集(慶尚編)（한국지명유래집(경상편)』国土地理情報院

中国語
盛琦、丁志明　1994『中国伝統体育風俗』百観出版社（台北）
張濤　2008『中国少数民族伝統体育文化生態学研究』中央民族大学出版社

日本語
朝鮮総督府編、村山智順著　1941『朝鮮の郷土娯楽』朝鮮総督府調査資料第 47 輯
姜在彦訳、洪錫謨　1971『東国歳時記』平凡社　東洋文庫 193
野村伸一　2000「朝鮮の農神祭その他」星野紘・野村伸一編『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版
李承洙　2002「密陽百中戯の担い手に関する研究」『体育学研究』47
張籌根　2003『韓国の歳時習俗』法政大学出版会
李京燁　2007「韓国の目連伝承と盂蘭盆斎」野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済－目連救母伝承と芸能の諸相』風響社

注記
・写真は出所が明示してあるもの以外は。すべて櫻井が撮影したものである。
・本稿は科研費助成事業「地域開発からみた日本の伝統的運動文化の現代的意義と新たな価値創造の探究」山田理恵代表　課題番号 26350724 の研究成果の一部である。

資料

聞き書き　韓国密陽百中ノリ・甘川蟹綱引き

- 調査地：慶尚南道密陽市　密陽民俗芸術伝授会館
- 調査日時：2015 年 8 月 29 日　午前 11 時 30 分～12 時 30 分
- 調査対象者：ハ・ヨンブ（河龍富、1955 生、人間文化財、密陽百中ノリ保存会会長、密陽演劇村村長、大慶大学校兼任教授）
  イ・ヨンマン（李容満、1939 生、密陽甘川ゲジュルダンギギ保存会会長、密陽百中ノリ保存会副会長）
- 調査者 ： 櫻井龍彦（名古屋大学教授）
- 通訳および文字起こし：韓寧爛（関西外国語大学非常勤講師）

（　）で示したところは意味がわかりやすいように訳者が補充した部分である。

河龍富さん

櫻井龍彦(以下櫻井)：まず、ここの綱引きの正式の名称はなんでしょうか。

河・ヨンブ(以下河)：「ガムネゲジュルダンギギ」。ガムという字は甘い（という意味の）ガムという字。

櫻井：ゲジュルというのは蟹の意味？

河：はい。

櫻井：どうしてこの蟹という名称がついたのですか。

河：「ガム」という字は甘いガムという字であって、ガムネ川が、その川が水が甘かったこと。今思うと、水が暖かかったんじゃないかな。その村に淡水の蟹が甚だしく多かった。淡水の蟹が多くて、村が上ガムネ、下ガムネと分かれていて、上下村が違うから、同じ部落なんですけれど上下村の水も違うし、氏族も違ったから、その村ごとに良い場所を先に取る(占領する)ために、戦いが多かった。昔は食べ物もなかったので、蟹を捕まえて蟹の塩辛を作ったり、おかずにもしたりしなければならないのに、毎年冬に捕れる蟹は限られているから、お互いに良い場所を取るために、上村と下村が綱引きをして、勝った側が良い場所を占めようとしたことが由来、それです。

韓寧爛(以下韓)：そしたらゲジュルと「ゲ」と名付けたのは蟹の形象から？

河：そう。蟹の形の枠を作って、両側から引いたと。いつからそういう風にしたかという由来はわかりません。

櫻井：それはいつ頃の話ですか？

河：それが、1980 年代発掘して、いつからやったか年代は未詳。わが村でやったけれど、1960 年代までには蟹が結構捕れたの。たくさん捕れて、小正月(上元)の冬に多く捕れるから、小正月にその行事をよくしたが、近年になってから、それが消失してしまった。それを再び発掘したのが、1980 年代。だから、われわれが、韓国のような場合は、昔の、われわれが 1900 年代写真や絵などの資料が田舎まで広がったということ。同じく昔は日本も韓国も伝統を重視したことではなくて、民間ではただ普通にやっていたことでした。ただ民間でやっていたことで、韓国では 1960 年代文化財という形式を作って発掘を始めたこと。1960 年、1963 年から人間文化財や無形文化財を指定し始めたことは 60 年代から。そのような制度や形式ができたので、文化財が消失したらいけないといって、無形文化財が消失したらだめだと思い、探し出し始めたということが 60 年代なの。文献も民間でやったことなので、文献もさほど残ってないです。文献も少ないし行事をした記録もそれほど多くないです。文献もあの、昔、密陽で、官で記録した「密陽であれこれをした」という資料は少しずつ残っているのはあるが、村に行って蒐集したり、どのような様子でやったかを発掘したのが 1980 年代なの。

櫻井：この綱引きの目的は何ですか。両方に分かれているから、普通は綱引きをした場合勝った方が豊作になるとか、農耕儀礼に関係するんですけれども、ここは蟹捕りの争いだから農耕とはあまり関係ないですか？

河：先ほども言いましたが、勝った方が席を取る。良い場所の占領です。１対１の対決があって、１対１の対決は、だから良い場所を占めることです。上村と下村の各村の最高の力持ち(力士)が出て、１対１で綱を引いて良い場所を占めて、この場合は蟹を捕るための良い場所ではなく､力比べゲジュルを 25 名の壮丁が引くための場所を占領するためです。場所と言っても少し傾斜がある所もあるようで、引きやすい、だから綱を引く時、有利な場所を占領するための１対１の対決があって、次は 25 名ずつ両側に、蟹の足が 5 個で、蟹の節(関節)が 5 個だから、25 名が両側で引く。25 名が引いて、ここで勝った方がいい席(場所)を占める。

河：年 2 回、無形文化財の発表の時と密陽アリランの大祝祭をする時だけ、大きい綱を引きます。25 分間します。25 名の壮丁が引くのは、一年に 4 回乃至 5 回くらい。今日（インタビューをした 8 月 29 日の今日は蟹綱引きの当日であった）は 25 名が引くことはありません

韓：25 名ではないのですか？

河：はい。

櫻井：25 対 25？

韓：それとも全体的で 25？

河：いや 25 対 25 です。

櫻井：今日はどうなっているのですか？

河：今日は 5 名

韓：5 名対 5 名
河：１対１もしくは 5 対 5。あるいは 25 対 25 でやります。
櫻井：中途半端な数はないのですね。７対７、3 対 3 など
河：はい、はい。
櫻井：昔は河原でやったのですか。
河：河原で。川が、幅 20m くらいの川があって、その横の田んぼでやりました。
櫻井：田んぼでやったことがあるのですか？
河：冬は農業をしないし、昔は大きい広場や庭がなかったので。
櫻井：綱引きは小正月でしょう？小正月に行ったのは何か意味があるんでしょうか？
河：蟹は冬に捕れたから。その時期に出るので。韓国では小正月って、昔は大きい名節(節句)だったから。
韓：そうですね。
河：名節だから、その名節の日に村人らが皆集まってする行事です。日本は歴史的に、地域的にどのような方式になっているか分かりませんが、おおよそ似ているだろうと思います。韓国という社会は氏族社会、部落、王様がいて、氏族で構成されています。日本の場合は領主が統治している社会。村と村が争う時に戦争を行うことではなく、このような綱引きをする。沖縄の方を見ると戦争をすることではなく、一つの力比べをするように、お互いに流血に至ることはなく、遊び(ノリ)で争いをするという文化が発達してきただろうと。領主と領主がいる場合は、うちの領土と相手の領土と言って、貴族が戦争し領土を占領しましたが、韓国は王様がいて、氏族社会なので、上村の人々と下村の人々が兄弟の関係かもしれないし、だから欲心はあるから、それでこのような綱引きが盛行したんじゃないかと、私は思っています。
櫻井：この綱引きは分かれるんでしょう。5 人と 5 人で。今も上と下で分かれているんですか？
河：東・西部、上甘、下甘。その村の名前が上甘村、上側にある村、それから下甘村。
櫻井：そこの村から人が出るのですね。
河：はい。
櫻井：これは男でも女でも参加できるんですか？
河：女の方は応援だけ。
櫻井：子どもはやりますか？
河：子どもも引かない。大人、壮丁だけ。とにかくすごく、綱引きをやってみたらわかるんですが、危険なので。
櫻井：今ではなく、昔の 60 年代までは農民がやっていたのですか？
河：はい。
櫻井：昔のその両班(ヤンバン)の人たちは関わらなかったのですか？
河：関わらないです。

櫻井：今はノリの中で、祭りや綱引きをするようですが、もともと関係なくて独立した行事ですか？
河：元来は小正月の行事として、独立行事。
櫻井：独立だったんですね。そうですね。
河：今の甘川ゲジュルダンギギ保有者(伝授者)なんです、ヨンマンさんは。彼の義父(妻の父)がこの村に住んで、全体が、密陽百中ノリのためにそれを発掘したこと。この方たちのすべての証言、昔はこのようにやったという話、ゲジュルの形はどうだったということを村人から、その証言を得て、密陽百中ノリを発掘したのです。
河：もともとその作業をなさった人は「キム・サンヨン」
櫻井：キム・サンヨン、この方が何をしたのですか？
韓：キム・サンヨンさんがすべて発掘されたということですか？
河：証言をなさって、その方が 1 代目の人間文化財です。
櫻井：今は亡くなりましたか。
河：はい。
櫻井：その話を河さんが聞いているということですね。
河：この方（隣にいる甘川ゲジュルダンギギ保存会会長、百中ノリ保存会副会長であるイ・ヨンマンさんを指す）が、子どもの時、どういう風にやった、大人たちがどのようにやったということを、キム・サンヨンさんが実際にしたことを。
櫻井：副会長さんのお名前を聞いてもいいですか？
河：イ（李）・ヨンマン、顔の容の字、満たすの満の字。今年 76 歳。
櫻井：76 歳、76 歳というと何年の生まれですか。
李容満(以下李)：1939 年生まれですが、39 年生まれだから。
河：日本の数え年で 76 歳。僕がその理由で数え年で言ったの。
櫻井：会長さん（百中ノリ保存会会長）は何年生まれですか。
河：私は 1955 年生まれ。密陽百中ノリの人間文化財で、イさんは甘川ゲジュルダンギギの人間文化財です。それから私は甘川ゲジュルダンギギの方では助教です。
韓：助教というのは何ですか？
河：人間文化財の下。伝授者のような者。
櫻井：もともと百中のときにはやってなかったですね。会長になってから引きついで綱引きをやっていたということですか？

百中ノリで作男を演じるイ・ヨンマン綱引き保存会会長

河：今は行事に、行事をする時に、このような公演などを。今はわれわれが公演という概念でやっているので。今は行事の時に人々に知らせるように。

韓：いつからこのように一緒にやるようになりましたか。一つの行事として。
河：1983 年度から今まで。
櫻井：イ・ヨンマンさんは甘川の出身ですか？
河：はい、そうです。その村。
櫻井：会長さんはどこに？
河：私は市内に住んでます。距離が 2 キロくらい。
櫻井：昔は、60 年代の頃は、小正月に一回やっただけですか。
河：はい、そうです。
櫻井：今はそうすると、いろいろあるんでしょうけれども、今は年間スケジュールはどういうふうになっていますか。
韓：今回、市役所に聞いてみたら、2 月 20 にもして、7 月 20 日もすると、このようにスケジュールがあると教えてもらいましたが、年間スケジュールはどういうふうになっていますか？公演。
河：年 20 回程度
櫻井：20 回くらい。それは地元でやるんですか、それともソウル、遠い所でやるんですか？
河：それは招待されて、ほかの地域から招待されて、ガンルンへも行けるし、ソウルへも行ける。これは公演の形式になっているので。
櫻井：招待されてね。韓国の全国。
櫻井：この行事は中断されたことはありますか？例えば朝鮮戦争のときとか、植民地時代などとか。中断したことは。
河：あの、むしろ、われわれが、よく植民地時代になって、差し止めた、差し止めたと言っていますが、そうではないです。それは違うと私は思っています。われわれの民衆のノリ文化等は日帝時代にもやりました。鉦もあって太鼓もあって、全部ありました。全部やりました。村ごとに。大きい文化財や、あの精神的な文化は抹殺されましたが、民衆ができるのは継続しました。これがどのような時期に多く消失されたかというと、近代に入ってから 1960 年代、われわれが近代化になったんでしょう？「セマウル(新村作り)運動」をしながら、その時に多くなくなりました。むしろその時期にできませんでした。
韓：その時からできなかったということですね。
河：はい。その前は村で小さいけれども行事をやっていました。むしろわれわれが「セマウル運動」をしたりしながら、50 年代、60 年代に何をしたかというと、あのノリ、昔はお年寄りたちが、昌慶宮へ行ったり、バスを貸し切ってプサンの龍頭山公園へ遊びに行って、鉦や太鼓を叩きながらやりました。昔は。やったが、鉦や太鼓を叩いたりしたが、ある時期に外国人が韓国に入ってくるようになって、(韓国人は）お酒を飲んだり、遊園地に行って騒ぎをするから（外国人にみっともないので）これを最初からなくしたのです。なくしたのでむしろ 60 年代、70 年代初までにはわれわれの伝統楽器がなくなってしまったんです。

昔は村ごとにすべてありました。その前は、日帝時代にもあって、6・25 戦争（朝鮮戦争のこと）の時もありました。すべてありました。すべてあってノリもある程度やりました。しかし、ある日突然遊園地文化ができて、近代化になり、遊びに行ける機会がなくなって、それから、60 年代なかばに朴正熙大統領が再び無形文化財を、再び、韓国に文化がないといわれるから、それを再び。昔はわれわれが外国に外交官が行ったら何をしましたか？朴大統領の時期。扇の舞をよくやったよね。それで、外国の人は韓国がとても暑い国だと知っていたのよ。そうなるとわれわれの伝統文化を再び発掘しようとして、60 年代に発掘し始めたのです。

櫻井：戦争時代もやっていたのですね。

河：そうです。同じです。

櫻井：今、保存会の組織というのはどういうふうになっていますか、どういう人が保存会に入っていて、会長、副会長、会計などの人は、それはどういうふうになっていますか。

韓：今、綱引きの保存会も組織されていますか。

河：はい、ここに一緒にいる。（李容満さんが）会長さん。

櫻井：綱引きの保存会と百中ノリと一緒になっているのですね？こちら（李容満さん）の会長さんは綱引きの会長でノリの副会長。こちら（河龍富さん）の会長さんはノリの会長で綱引きの方は助教。

韓：会計などは？

河：それはない、ここで一緒に。

櫻井：会員は、どうすれば会員になれますか。

河：これが好きな人。現代になってから田舎には人がいなくなってきましたが、人は少なくなってもノリは形式が作られ、地方の無形文化財として指定されたので、ノリの構成は昔から伝わってきた形で演出されているので、構成員だけいれば大丈夫です。文化財という形式になることで、ノリ、昔の祝祭としての性格はもう残っているのではなく、いまは無形文化財という形式として作られているので、それに従ってやっています。昔は全体的にやっている途中でお酒を飲んだりしてから、再びやったりしましたが、今は公演の時間に合わせてする遊び(ノリ)になってしまったというふうに思ってくだされば いいです。

櫻井：そういうことなら、この地域の人だけではなくて、どこか、全然違うところの人でも、これが好きだからと言って入りたいと言ったら、入れるということですか？

河：われわれの密陽の人の中で伝統が好きな人だけです。

櫻井：密陽の人ではないとやはりだめですね。

河：それから、大多数の人々が、現在会員になっている人は、農業に従事している方が約 80%くらいです。

櫻井：農業をやっている人。80%が農民。今、会員は何人くらいですか。

河：約 45 人。

櫻井：これだけ年に 20 回もあると、農業やっている人たちですから、みんな仕事があるで

しょう？どうやって 20 回もやっているんですか。
河：事前に（農作業を）やっておいてから行きます。今はこの百中ノリの期間中は、昔は一番暇な時期でした。ところが今はハウスもやったりする方が多くいるので、この方たちは午前中は仕事をしてから午後に出てきます。また、それから公演に行くとしたら、予め仕事をすませてから。このように今、やっています。
櫻井：そうですか。
河：密陽にも大きい綱をかけて、雌と雄の綱をかけて片側で 2,000 名くらい引く綱引きをやりました。やったが、今はそれはできないです。われわれがこんなに大きい綱で雌綱と雄綱をかけて、その大きい綱の横にまた子綱を結んで、約 2,000 名ずつ引く綱を最後に引いたのは、あれ、何年ですか？80 何年だろう？
李：85 年頃になるかな。たぶん？
河：その時に最後の綱引きをしました。自分たちで綱を編んで、みんな一緒に作ってやったのですが、今はそれができる人力もないし、それをしようとしたら財政的な負担になるでしょう？国が何か支援か補助をしてくれないとできないです。無形文化財として指定されていれば、「霊山綱引き」とか「唐津機池市里綱引き」のようなところは無形文化財という形式を作っておいたから、それに準じて今まで伝わってきたのです。国の補助があるから。あの、日本も綱引きが多いというのは、あの、綱引きが盛んなところを調べてみたらおわかりになると思いますが、たぶんは氏族社会、戦争をしなった都市がたぶん多いだろうと、私はそのように思っています。場所は昨日われわれが公演をやったところです。
韓：綱引きが発展したのは、戦争がない村でやったからであろうと会長さんは思って、日本の沖縄もそうではないかと推測しているのです。
櫻井：平和じゃないといけないですね。
韓：はい。綱引き、大きい綱引きがうまく伝承されているのは無形文化財として指定されて、補助金をもらわないとなかなか続けられないので、密陽の大きい綱引きは無くなったのです。
櫻井：85 年ぐらいまでやったのですね。85 年までは蟹綱引きと一緒にやったのですか、それとも別々でやったのですか。
河：大きい綱引きは一回だけやりました。
河：今も、もし国からの財政的な支援があれば、この方たちはすべて作れます。大きい綱を作れます。その技術はまだ持っています。そんなに大きい綱は作るのに簡単ではないです。藁を編んで巻きます。大きい綱を作るために。そうしないと切れてしまうので、縄を綯うように、その技術、大きい綱を作る技術はまだ持っています。
李：引いた時に人が怪我をしたことがありました。ころんで。多くの人が怪我をしたので、85 年以降しないようになりました。
櫻井：それ以前にはやらなかったことはないのですね？
河：続いてやりました。

韓：ずっとやりましたか？
河：何年に一回。2 年おきに一回やりました。
櫻井：蟹綱引きと大綱引きは、一緒の時期にやったのですか、別の時期にやってたのですか。
河：別々にやりました。大きい綱は春に。5 月にやりました。
櫻井：5 月？端午節とか？
河：そうです。
櫻井：そしたら端午節にやるこの大きい綱引きの目的は何ですか？
河：祝祭。遊び。市民全体の祝祭です。
櫻井：場所はどこですか？
河：昨日の広場。その時は争いをしようと毎日ということではなく、祝祭。密陽の市民全体の祝祭です。
櫻井：それは機池市と同じく雄と雌を合わせて、間にかんぬき棒を入れるやり方ですか？
河：はい。はい。このようにやって…
櫻井：片方はどれくらいの長さですか？
河：150 メートル。密陽の大きい綱はとんでもなく大きいです。
櫻井：大きいですね。
河：本当。大きい。
櫻井：今は蟹綱引きの方は補助金も政府からの支援も何も出ていないのですか。
河：あります。毎月あります。文化財協会から出ることもあるし。それがね、もし 60 年代に無形文化財という制度がなかったとしたら、たぶんわれわれの伝統文化は消えてしまったのではないか…。
河：現在になってから人がいないので、田舎に人がいないんです。今も百中ノリをしようとしても人数が足りないので、今後はもっと大変じゃないかな。
櫻井：会員からは別にお金を取ってないのですか？会費など。
河：まったくない。
櫻井：会場に市長さんも出てきたから、密陽の市から補助金を出しているとか。
河：韓国は国家無形文化財があって、百中ノリは国家文化財（注：日本でいう重要無形文化財にあたる）であって、甘川ゲジュルダンギギは慶尚南道の地方無形文化財。
櫻井：ノリは国指定？綱引きは道指定？
河：機池市里は国家文化財、甘川ゲジュルダンギギは地方文化財。
櫻井：ノリが国指定だから、ノリの方にお金が来るということですか。
河：管理は国家文化財は文化財庁で、国家が管理して地方文化財は地方が管理している。
櫻井：綱引きをするのは 5 人対 5 人、25 人対 25 人で引くんですが、そこに一般の見学者が参加することもできますか？
河：はい、できます。

櫻井：材料は藁ですか？
河：はい。
櫻井：その藁はどうやって調達するんですか？
河：最近農業をしなくなってきたので、倉庫に行ってみたらわかりますが、事前に用意しておきます。買っておきます。それから綱を作る藁は長くないといけないので、その長い藁を特別に契約して買ってきます。
櫻井：日本では綱は、毎年あたらしいものを作るんですが、こちらの綱はどうですか。
河：われわれも小正月の前にここで綱 9 を作る過程がまたあります。全会員が集まって。毎年。旧暦の 1 月 15 日前に。
櫻井：前ですね。
河：小さい足の方は毎年作りますが、大きい胴体のゲジュルは補修だけします。
櫻井：補修だけね。それはいつもどこに置いてあるのですか？普段は？
河：ここの倉庫。
櫻井：倉庫にある。一つだけあるんですか？二つ、三つ用意してあるんですか？
河：25 人用もあって、10 人用のものと、5 人用もあって、2 人用のものなど 5 つあります。
櫻井：引く人数によって真ん中の大きさが違いますか？
河：真ん中の大きさは全部違います。
櫻井：日本だと、綱引きが終わった後、その綱をどうやって処分するかというのは、いろいろな事例があって、焼くとか、川に捨てる、それから切り刻む、いろんなやり方があるんですが、最後に綱の処理についてはどのようにしていますか？
河：保管しています。
櫻井：保管して藁が腐ってきたらどうしますか？
河：(この甘川蟹綱引きは)大きい綱とは概念が違って、要するに大きい綱は一回で終わり、また大きい綱は保管できる場所もないので、厄払いとして大きい綱をそのように(日本のように)して処理しますが、われわれ(甘川蟹綱引き)は小さい村でやる一つの行事なので、その綱は、ノリをやっていることですでに一連の厄払いはしてしまったことになります。だから、（綱も小さくて保管できることもあり）行事が終わったらその綱自体は保管します。
櫻井：綱は神聖なものではないということですか？綱を龍、蛇として思ってはいないのですか？
韓：大きい綱はそうかもしれないけれども、ここでは「蟹」ですね。
河：ちょっと待って。お兄さん（イ・ヨンマンさん）は先に準備しに行ってください。
李：私はお先に失礼します。（出て行く）
韓：続けてよろしいですか？
河：はい。
櫻井：綱は日本ですと、縄を綯う時は、普通は右編み、ところが神様に関する時は逆で左

編み、こちらは蟹綱を編む時に右方向に編みますか、左方向に編みますか。
河：左縄、左編み。
櫻井：普通のは？
河：普通の縄はこのように、右編み。われわれが普段神様や、遊びや祭儀をする時とか、子どもが生まれた時家の前にかけるしめ縄は左縄。
櫻井：あ、日本と一緒ですね。
河：結局は、ある意味でこれはたぶん他の国も同じだと思います。カトリック礼拝と仏教の儀式はおなじですよ。カトリック教会に行ってみると、仏教の法会の順次と同じです。85%、90%がそっくりです。究極的にわれわれが神様に何かをするというのは、全部似ているようです。どんな世界でも。私はそのように思っています。私は韓国で先に左にした、日本で先に左にしたと言うのも必要ないと思います。神様に祭儀をする時に綯う綱はすべて左縄だから。
櫻井：そしたら韓国の人もやはり神事ね、神様に関することは左。人間世界、普段の生活は人間世界ですから右。神様に関することは人間ではないから逆にする。韓国も同じですね。
河：私が言ったことは合っているでしょう？似ている思考ですね。
櫻井：綱を作る時は、地面で作るんですか、それとも木の枠を作って、その木に架けながら編んでいくんですか。地面で編むのですか。
河：今日ご覧になったらお分かりです。今日公演でお見せします。チャクテゥマル(木の枠)を作って、人々が 6 名で、藁を渡す人がいて、綱を編む人がいる。3 人で。
櫻井：日本と同じですね。
河：確かに同じです。私は学者たちが、日本が先だとか、韓国が先だとか、中国が先だと言っているのは意味がないと思っています。韓国が先だ、日本が先だ、ヨーロッパが先だというのは学説として出ているのよ。どこが先というのは、東洋が先だとかいうのは、私は意味がないと思っています。ただ学説だけだと。それはキリストでは天さまが先で、仏教では仏さまが先で。天という存在は仏教でもキリスト今日でも同じです。外国でも。お母さんたちが、びっくりした時、「アイグ、ハヌニム（天さま）」と言っている。天という存在は、遥か昔から、上古時代から、天という存在はありました。ただ恐ろしい存在なの。それが、何か、キリスト教では「ハナニム（天さま・天主）」が先で、仏教では…。そのように言う必要はないですよ。それと同じく民間の芸術たちは農事をする時も、方法も同じだから、どこでも同じではないかと。
櫻井：その綱を作る時に、歌を歌いながら作るんですか。
河：はい。（歌がなければ）面白くないでしょう。単なる労働をすることでもないし。
櫻井：その歌は綱引き専用の歌なんですか。
河：引く時に歌います。綱を引く前に、五土地神つまり東西南北、中央の神様に儀礼(挨拶)をして、その後、綱を引くときの歌(ソリ)。その中に「密陽アリラン」も入っています。

櫻井：土の神様って、この土地の神様？
韓：日本だったら地鎮祭ですか？家を建てる時に。
櫻井：土地の神様。
河：東西南北、中央に神様がいます。
櫻井：挨拶してから。
河：その神様にお知らせをして、遊び(ノリ)をします。
櫻井：それは、今は、あのイベントになっているからそうなのか。そうじゃなくて、昔から河原でやっているころも歌を歌っていたのですか。
河：はい。そうです。すべて聞き取りして証言を得て発掘しました。
櫻井：綱を編む時になにか道具がありますか。
河：道具はないです。すべて手でやります。
櫻井：先ほど蟹綱引きとそれ以外に 85 年まで大綱引きをやったということでしたが、大綱引きは、こちらの人が龍に見立てることがありますか？
河：それはないです。綱のほとんどの形が龍のように見えるので龍綱と言いますが、龍とは思っていません。農事なので農神をまつるだけで、龍をまつるのではない。
櫻井：農神台がありましたね。
河：これはすべて民間信仰です。東方神様がいて、中央の神様がいる。農事をする人は農事をする神様がいると思っています。
櫻井：こちらの方は農神という、農神は何だと思っていますか。龍なのか、蛇なのか、分からないですか。
河：農事の神さまというだけです。山の神でもサルとか動物の神でもない。
櫻井：男か女かも分からない。
河：そんなことない。だから韓国とほかの国との違いはたぶんそれでしょう。天の神様が一番で、その下にわれわれの民間信仰で神様がいる。漁夫は龍王神がいると思っています。
河：龍王は海の神様。
韓：いつまでに会場に行かなければならないですか？
河：一時まで。
櫻井：日本だと綱引きをやる前に、集落の中を綱を引いてまわる、巡行するという、そういうことをやるんですが、こちらでは綱を村の一軒一軒まわる、巡行するということがありますか。
韓：綱を全部持って？
櫻井：持って、引っ張ってもいいし、担いでもいいし。村の中でまわることは？
河：ないです。文化的な違いなのでしょう。日本は美学が発達していますね。
櫻井：なぜそういうことをするかというと、綱に自分の病気とか不幸をみんなつけるわけです。一軒一軒回ってね、その綱を最後、川に捨てたり、焼いたりすることは、その病気とか厄災を全部追い払うためなんですね。

河：先ほど言いましたが文化的な差です。日本はそうだから衣装や意味付与にとても美学を重視していて、韓国の人々はただ、服も特別なものを着ることでもなく、単に民衆が集まっているだけです。先ほど言ったように、日本は領主支配下で、お互いに誇示する、こちらの領主とあちらの領主がお互いに見せつけることで、ヨーロッパも同じです。領主の概念、城の概念です。韓国は全体の、一つがいれば、その下は全部が同等だと見ている。別に衣装をきれいなのを着るとかではなく、民衆の形態です。ヨーロッパとアメリカは完全に別で、ヨーロッパを見ると領主体制だから文化がとても発達しています。演劇やらすべてのものが。領主たちが、自分たちを誇示するために俳優を育てたのが本質で、韓国の場合は「グァンデ」です。自分が好きだからやるだけです。われわれが見せるためにすることではなく、我が部落で好まれていること。それから最後は王様が好きなことです。ヨーロッパや日本はもう一段階あったからです。民衆がいて、その上に貴族がいて、王様がいること。それで完全に民衆文化が韓国ではすごく発展している。ヨーロッパや日本は貴族文化が発達している。

一つの家、家門が大事ではなく、韓国は、ひたすら王様が大事です。日本は家臣ということが重視されているけれども。韓国は、だから韓国の戦争史は外国からの侵略で、ヨーロッパは貴族たちの戦争です。韓国では氏族と氏族の戦いはある時期無くなってしまったが、ヨーロッパや日本は近代まで、自分の国の中で土地占領の戦いをだいぶやったことです。それが日本の文化の方までつながっていると思います。韓国は民衆の「遊び(ノリ)」がすごく多いです。韓国に来て、あのノリをご覧になると、民衆のノリでの衣装は同じです。日本はすべて違います。貴族との衣装によって、祭りを見ても全部違います。韓国はどんな地域に行っても農楽をしたり、何をしようとしても衣装は一緒です。

韓国は劇場文化が発達していなくて、マダン(広場)文化が発達しています。西洋文化は劇場文化。日本も劇場文化の発達というのは、400 年もなってないみたい。日本の文化芸術は 400 年もなっていないでしょう？日本は、戦争ばかりして、韓国文化は自分どうしで遊んだり、食べたりした文化なので、昔から、伝わってきた民俗文化がとても多いです。

櫻井：綱引きを 1960 年代までやっていたということでしたが、昔甘川で。綱引きは何回やるんですか。一回勝負ですか、二回、三回？

河：三回勝負で二勝することです。最近は一回勝負です。

櫻井：今日も一回ですね。

河：はい。

櫻井：引き分けっていうこともあるんですか。

河：うーん。

櫻井：審判は誰がするのですか。

河：先のヨンマン(李容満)さんが。その村の最高の長老です。

櫻井：昔、甘川でやった時も同じですか？

河：審判をなさる人は、お年寄りではなくて、その長老というのは、最高齢者でという意

味ではなく、管理でもなく、その村で最も尊重されている、認定されている、名望がある方を言っているのです。もちろんある程度の年齢もなければなりません。
櫻井：日本では綱引きをやる時に相撲がセットになっていることがあるんですが、韓国では綱引きをした後、相撲をやりますか。
河：われわれはしないです。
櫻井：この密陽には相撲文化はないですか？
河：60 年代まではありましたが、70 年代から無くなりました。私が幼い時は相撲など全部やりましたね。私は 5 歳の時から祖父について行ったから。私が初めてこの民俗の世界に飛び込んだのが 5 歳の時からです。祖父、相撲場、闘牛大会、そのような所に祖父について行って、祖父が密陽で、その民俗行事の最高の長老だったので、祖父について行きながら踊って、小童としてやりました。
櫻井：お爺さんが伝承者ですか？子どもの時から大好きでしたか？遊び(ノリ)が大好きな人。
河：それで、わたしが人間文化財になったのです。(笑)
櫻井：若いのにまだ 50 代で人間文化財になったのはすごいですね。
河：48 歳のときなりました。日本の年齢の言い方では 47 歳のときです。
櫻井：日本ではそんな若い人はなれません。
河：韓国で最年少でなりました。韓国で初めて 40 代で人間文化財になりました。韓国でも同じく 60 歳以上にならないと無理です。
櫻井：今は人間文化財ですね。
河：国からお金ももらうし。
櫻井：国からお金を、給料はもらえるんですか？ああ、そうですか。それで食べていけるんですね。
河：それで生活はできませんよ。今 140 万ウォンをもらっているから、日本円で、14 万円？
櫻井：14 万円？
河：医療保険などはやってくれます。これで生活はできません。
櫻井：月 14 万円。そんなにもらえるのですか？
韓：これは多くないです。韓国の経済状況を見たら。20 万円くらいもらわないと生活できないです。韓国では。
河：私の場合、学校、大学などに出講したりしています。昨日、雨の中で私が舞っていることを見ましたか？あのような作品をもって外国の公演もしたりします。
櫻井：昨日の踊りですね。
河：演劇もやってます。
櫻井：あ、演劇も。
河：日本にも 90 年代から、アレスフェスティバル、東京の。名古屋にも行って、公演しに

よく行きます。新潟、大阪。舞で公演にも行ったり。舞だけでフランスにも行きました。
櫻井：芝居はお一人ですか。
河：いやたくさんです。劇団「グリペ」という、大韓民国最高の劇団で、それが密陽にあるのです。演劇村があり村長もやっています。
櫻井：演劇村の村長もしているのですか？多才な人なんですね。いろんなことができるんですね。
河：芝居をしたのは 88 年からだから、28 年くらいになったようですね。まあ、有名かな。(笑)
櫻井：有名な方なんですね。
河：9 月 15 日には大邱で個人の踊り公演があって、ソウルで 8 月 30 日は国学院で私の個人公演があります。1 時間半の公演です。
櫻井：学生とお弟子さんがたくさんいますか。
河：百中ノリでは弟子が別にいて、他の学校に行くと、また学校の弟子がいます。
櫻井：今、このノリの会員の中で、一番幼い子は何歳ですか。小学生・中学生？
河：うちの一番若いのは誰なの？ジュノじゃない？
崔：ピルウォンです。
河：41 歳？
崔：44 歳です。
河：44 歳です。
韓：会員は大人で、一番若い人が 44 歳です。
河：若い人はだんだんいなくなります。
崔：ジュノが 45 歳。
櫻井：結構高齢化していますね。
河：49 歳、うちの崔・ジンチョルが末っ子です。(笑)
櫻井：20 代がいないのですね。最後の質問ですが、これからもこの伝承を将来に伝えていきたいとお考えだと思いますが、今直面している課題とか、後継者の問題とかいろいろあると思いますが、どういうことが課題で、将来どういうふうにやっていくおつもりかを教えてください。
河：あの、日本も韓国も、世界各国の伝統が制度の中に入っているので、民衆が主体的にやった時代はすでに過ぎ去っています。日本も韓国も若い人がやらない、やりたくないと思っているのですが、その若い世代がやらない理由は確かにあるはずです。それを（理解することが)、われわれの課題ではないでしょうか。理由がわかったあとで解決策が出てきます。今、ただ、「やれ」、「しなさい」としか言わないで、われわれも具体的になぜ今の現代の人たちがやらないかのか考えようとしません。われわれのものは良いこと、伝統は良いことだとしか言わないのです。
　いまは（生活の）リズムが違います。現代の人はリズムがすごく速いでしょう。昔は周

辺の環境がゆったりしていましたが、今は速く動かないと、遊び(ノリ)文化や音楽的な面のすべてのものが、文化芸術が速くいかなければならないということです。即興的ですぐ感情に繋がっていることです。われわれがまだ現代に追いついていけず、単に昔のことが良いことだと、そればかり言っています。伝統を守りながら現代の人々と交感できるように、われわれが作り出さなければならないということです。

お金のことも解決したいです。このような仕事をやっている人は、昔はみんな同じく貧しかったんです。日本も韓国も、民衆はただそこそこ暮らしていました。暮らしていましたが、その時代と今の時代は違います。文化芸術をやっている人は、食べていけなくても芸術ができるという時代はもう過ぎ去っています。若い人たちに、現在の今の同時代を生きている人たちには、ある程度のお金が支えにならなければならないことで、それがあれば若い人たちはやりだすんじゃないでしょうか。それを作りだす過程が、私は重要だと思っています。

櫻井：日本もどこも、みんな高齢化していて、若い人の伝承者もいないので、同じような悩みを抱えています。

河：そうそう、同じなのよ。

櫻井：今日はありがとうございました。それでは玄関で記念撮影をしましょう。

河：私は明後日から学校に出なければならないのです。

櫻井：学校？大学で教えているんですか。

河：ネットで「ハヨンブ（하용부）」と入力すると出ます。孫スク（손숙）さんと姜ブザ（강부자）さんと一緒にやっている作品です。

櫻井：ホームページがあるのですか？

韓：ホームページではなくて、あの韓国の検索ウェブ。グーグルのような。

櫻井：この保存会のホームページはないですか？

河：ないです。

櫻井：ぜひ作ってください。

河龍富：http://www.nocutnews.co.kr/news/4480729